

# おいでん・さんそんSHOW

3月号  
2018.03.01発行

特集|平成29年度いなかとまちのくるま座ミーティング開催

## 生き方が選べる社会、支えあう社会が見えてきた




第2部くるま座談義、分科会①の移住定住&スモールビジネス研究会のグループトークの様子



(上) 基調報告を行うセンター長鈴木辰吉  
(下) 会場を埋め尽くす参加者が熱心に聞き入った

センター長のミライのフツに  
向かって!

2017 第10回  
むらおさめの作法



センター長 鈴木辰吉

いなかとまちのくるま座ミーティングの基調報告「見えてきたミライ」で述べた「集落のたまたま方を研究する」旨の発言が物議を醸している。少々センセー

シヨナルな表現で、言葉足らずだったようだ。

いなか暮らし総合窓口を担当する「空き家にあかりを!プロジェクト」による移住者受け入

れ地域の啓発、豊田舎とよたのいなか移住計画による名古屋圏を中心とした移住者誘致の取り組みから見えてきたものは、人々の価値観の多様化、農村回帰の潮流に目を向け、空き家を活用して集落存続に向けた自治体に取り組みば「過疎なんかこわくない」ということだった。一方、日本の人口減少は確実に進行し、山村地域の集落の再編、一部集落の消滅も避けて通ることは

できないだろう。いなか暮らし総合窓口を担うセンターは、限界集落化に抗い、あるいは持続的集落としての復活に取組む集落を応援することを使命とするが、消えていく集落を荒涼とした廃村にすることなく、最後の一人まで寄り添うための術を持たなくてはならない。

集落の消滅とは、そこに人が住まなくなったことを言うが、農地や山林などの土地や家、神

2月4日(日)、平成29年度いなかとまちのくるま座ミーティングを豊田商工会議所で行いました。

鈴木センター長による基調報告と対談の第1部には115名、第2部のくるま座談義には101名、第3部の交流会には36名と、市内外から多数のご参加をいただきました。

おいでん・さんそんセンターの5年を振り返り、これからの未来について考えた一日の様子をご紹介します。

**基調報告『センター5年の軌跡ー見えてきたミライ』**

毎年、基調講演に全国各地で地域づくりなどにご活躍の方をお招きしていましたが、今回は『センター5年の軌跡ー見えてきたミライ』と題してセンター長の鈴木辰吉が講演を行いました。

5年間で約170のマッチングを行い、山村部と都市部両方の課題に向き合ってきました。昨年の4月には民間に移行し、公の信用と民の迅速性・柔軟性・専門性の両方を持った組織となりました。

過疎とどう向き合おうか  
山村部の過疎と向き合うこと  
で見えてきたのは、移住対策の、

### イベント情報

#### 第7回ほんわか里山交流まつりIN香恋の里しもやま

昨年に引き続き、下山地区で行われます。魅力的な出店、出演者に数多く出会う一日です。いなか暮らしに関する現地案内や、パネル展示も同日に行われます。

- 日時:2018年3月25日(日) 10:00-15:30
- 場所:まどいの丘(豊田市神殿町中切7-2)
- 出店:和合自治区、香恋の館・山遊里と、餅神商店、しもやま再来プロジェクト、三河湖共栄会、下山元気そば愛好会、柴田園芸、他多数○マイ箸、マイ皿のご持参にご協力ください○イノシシハムの振る舞い、農業不使用下山茶葉の和紅茶、下山茶の飲み比べあり○手作りこんにやく、下山産しょうがパウダー、温かいしょうがレモネードの販売、しいたけの植菌体験あり
- 出演者:雅(和太鼓)、大正琴愛好者グループ、下山中学校吹奏楽部、星空ラマン(篠笛とピアノ)、下山民謡会、豊栄会(日本舞踏)、ハッピーマザー&ファーザーの会(手話コーラス)、移住者によるフラメンコ、豊栄会他有志(ふるさと音頭)
- 住みにおいでん!いなか暮らし:和合自治区の空き家、宅地候補地、空き農地の現地案内や、農ライフ下山研修所によるパネル展示を行います。いなか暮らしや米、野菜づくりにご興味ある方は是非、ご参加ください。

- 主催:第7回ほんわか里山交流まつり実行委員会
- 問合せ:おいでん・さんそんセンターTel.0565-62-0610  
実行委員会(新貫)Tel:090-8672-9374
- HP: 耕Life特設ページ <http://www.kou-life.com/honwaka/>



← 昨年のステージの様子

#### 小原地区 焚き火を囲んで田舎暮らし説明会と竹細工体験

中山間地域での田舎暮らしを考えている人を対象に、宅地分譲予定地での現地交流会と竹細工体験を開催します。

- 日時:2018年3月25日(日) 9:30~13:00
- 場所:2戸2戸宅地分譲現地(豊田市永太郎町蔵満地内)
- 参加費:不要(定員は10組30名)
- 内容:○知つとく座談会(小原暮らしの紹介)○宅地分譲予定地の見学・説明○竹細工体験○お昼を兼ねた交流会(ジビエ風料理など)※おにぎり等をお持ちください。
- 持ち物:筆記用具、タオル、軍手、おにぎり等のお弁当、飲み物※暖かい服装でお越しください。※見学のみの場合も、お名前、年齢、性別などをお知らせください。
- 申込・問合せ:豊田市小原支所 地域振興担当 Tel:0565-65-2001 Fax:0565-65-3695  
e-mail:obara-shisho@city.toyota.aichi.jp

その他の情報は、センターHPをチェック!





齋藤さんの話に耳を傾ける参加者

き方、持続的な輸送システムなどのキーワードが出され、目指す持続可能な中山間地域農業の方向性が垣間見えた分科会となりました。

『子どもをど真ん中にした持続可能な地域づくり』をテーマに、長野県泰阜村で教育を通じて持続可能な地域づくりに取り組むNPO法人グリーンウッドの齋藤新さん、稲武地区の子育てグループ稲武地球子屋メンバー庄司美穂さん、子どもの自然体験を進めるセカンドスクール部会幹事の新實一俊さんのお話を聞きました。

齋藤さんからの事例紹介を聞いた参加者からは、「子どもの力、地域の人の力を信じるという言葉が印象的だった」という感想があり、コーディネーターの安藤さんは「大人が幸せな姿を見せることが、子どもの幸せにつながる」と感じたと話しました。



まよめの全体会の様子

まよめの全体会を行い、各分科会のコーディネーターから内容についての発表がありました。

分科会の途中で到着した豊田市長からは次のような話がありました。「先日行われたSDGs（持続可能な開発目標）国際会議の事例では先進国が貢献するという形から始まるが、結果的には途上国からの貢献もありお互い様になっていました。その構図と同じように、センター立ち上がり時は都市が田舎を手伝うイメージでしたが、つながることによって田舎の価値が見えてきました。例えば都市の高齢者の孤独や孤食の課題については、支えあいの社会がある田舎にヒントがあります。」

くるま座ミーティングが始まって初めての半日開催でしたが、時間が短い分、集中して密度の高いシンポジウムとなりました。（木浦幸加）

REPORT

### 大和ハウス(株)の社員がCSR活動を実施

小原地区で植樹、旭地区で竹林間伐



2月5日(月)、大和ハウス工業(株)豊田支店の社員22人が、平畑町(小原地区)の矢作川河川敷で景観整備をおこなう住民組織「里山和(さとやまなごみ)」らのメンバーと植樹活動を行いました。この活動は、高齢化で作業の担い手不足に悩む里山和と地域貢献活動の場を探す大和ハウスを、当センターがマッチング。参加者は、地域住民の手ほどきを受けながら四季桜、モミジなど苗木70株を植栽しました。

9日にも平畑町対岸に位置する有間町(旭地区)で活動する「有間竹林愛護会」と社員19人が河畔竹林の間伐を実施しました。大和ハウスさんの意欲的な取組に感謝します。(坂部友隆)



植林活動の様子

REPORT

### 菌ちゃん先生の土づくり・野菜づくり・体づくり講座開催

昨年の開催が好評で、今回は2箇所で開催



昨年の6月に開催して大好評だった吉田俊道さん(菌ちゃん先生)の講座の第2弾が開催されました。吉田さんの話を地元の方に聞いて欲しい、という前回の参加者の思いが形になり、2月16日(金)に旭地区、19日(月)に下山地区で開催され、旭40名、下山67名が参加しました。

菌ちゃん農法は、美味しく健康な野菜づくりのために、土ごと発酵させ良質な微生物を増やす農法で、元農業普及員の吉田さんは、菌ちゃん農法と人づくりを普及するために全国を飛び回っています。今回は、実地研修もありました。自分の農場で様々な農法を実践している吉田さんは、「生ゴミリサイクル」と「雑草と米ぬか」の2種類の土づくりをレクチャーされました。健康な野菜づくりの楽しい輪が広がっていきそうな、素敵な講座となりました。(小黒敦子)



中央で手を挙げているのが吉田さん



我々がこれから向かっていくのは、Studio-1代表の山崎亮さんが著書「縮充する日本」で述べているように「人口や税収が縮小しながらも地域の営みや住民の生活が充実したものに、なっていく仕組み」の中で、生き方が選べる社会、身近に相談できる相手がいる支えあつた社会です。

**滋澤寿一氏xセンター長**  
基調報告に引き続き、豊森なりわい塾塾長の滋澤寿一氏とセンター長との対談が行われました。

センターの運営方針を決めているプラットフォーム会議メンバーの一人でもある滋澤氏は冒頭に豊田市

に関わることにしたいきざつを語りました。また、全国の地域づくりに見るある滋澤氏は、都市と山村をワンセットに捉えて双方の課題解決に取り組むセンターは、全国的にも類を見ない存在だと述べました。

センター長は豊田市役所の産業部に在籍していた頃から、センターが立ち上がるまでの経緯を話し、その時から関係していた民間の人や団体が、現在もセンターを支えてくれていることで地域が変わってきていると分析しました。また、センターができる前から農都交流や移住受入れに取り組んでいた足助地区の新盛や冷田のような自治区があり、他地域の良いモデルになっていることを説明しました。

滋澤氏からは、来年度で10年を迎える「豊森なりわい塾」(※1)の振り返りがありました。地域づくりのバトンを渡していく人材を育てることが、これからのセンターの大切な使命であり、豊森なりわい塾を引き継ぐ形の機能を持つ可能性についても言及しました。

最後にセンター長は、これからの5年は課題が持ち込まれるのを待つのではなく、自ら前に進む取組をしていくこと、これまでの5年間で蓄積したノウハウ



グループトークの内容を発表する様子

ウを全国に展開していくことへの抱負を述べました。

**くるま座談**  
分科会①「移住定住&地域スモールビジネス研究会」  
「コーディネーター村田元夫氏」  
「地域で違う?」移住のカタチ」をテーマに、新城市から4名、東栄町から1名、設楽町から1名、豊田市の足助地区、旭地区からそれぞれ1名、計8名の移住者をゲストに迎えました。ゲストの移住に関する経緯や、現在の暮らし、地域に関する情報は、あらかじめ資料にまとめて参加者に配布。ゲストの自己紹介も一人2分ほどと最小限に納め、1時間ほどを6つに分かれたグループトークに当てました。

まよめの時間に出たキーワードには、移住者の特徴に『多業』がある、女性一人でも暮らせる、などがありました。また、移住者は永住する覚悟ではなく、たま

たま田舎に来ていてというノマド指向であるという意見も出ました。

**分科会②「食と農部会」**  
「コーディネーター西川芳昭氏」  
「中山間地域農業は守れるか」をテーマに、農事組合法人伊熊宮農クラブの集落宮農、(一社)モビリティ・ビレッジの農産物の輸送支援事業、トヨタ生活協同組合の食育農業体験事業の先進的な事例報告を踏まえ、熱い談義が交わされました。

2014年の国連「国際家族農業年」のメッセージは、小規模家族農業が世界の食料安全保障や地球環境、生物多様性に有効であるというものでしたが、農業の大規模化、競争力強化を進める日本では国民に届きませんでした。専門家である西川教授のレクチャーから、効率の悪い中山間地域農業の立ち位置が明らかになりました。

談義では消費者と生産者を直接つなぐ、自然栽培などによるブランド化、農福連携、多様な働

レクチャーするコーディネーターの西川さん

(※1)トヨタ自動車・NPO・豊田市 3者共働の人材育成プログラム